

(2) 西曲輪整備計画

ア. 西曲輪の概要

① 曲輪の性格

築造時期が判明し、天文 20 年（1551）に武田義信の新居として造営された「西ノ御座」あるいは「西之御館」と考えられ、史跡内において戦国時代の姿を最も良好に留める曲輪である。

② 現状地形

現状の地形で東西 100 m、南北 200 m と主郭の半分の規模を呈し、東側に土橋で連結された主郭がある。主郭に対し若干北に位置をずらして造営されており、堀は傾斜する自然地形のため南半が水堀、北半が空堀となっている。土塁は主郭とほぼ同等の規模を有すが、東側は北から徐々に低くなり、土橋手前で全く認められなくなる。曲輪内は三段の平場が形成されており、南北に柵形虎口が構築され、虎口の外側には馬出が設けられている。

③ 絵図史料

近世までの絵図資料をみると、西曲輪・北側の各曲輪の表現に下表のような類型がある。後述する発掘調査により、武田期及び織豊期にそれぞれ数次の変遷があることが判っており、絵図資料の前後関係や信憑性については発掘調査の進捗により検討すべき課題である。

絵図資料の西曲輪・北郭の表現

類 型	西曲輪			味噌曲輪			無名曲輪	御隠居曲輪
	曲輪内区画	区画の虎口	北馬出	東柵形虎口	北西虎口	北虎口		
A	○	○	角	○	○	—	—	—
B	—	—	角	○	—	—	—	—
C	—	—	角	○	—	○	—	—
D	○	○	角	○	—	—	○	○
E	○	○	角	—	○	○	—	—
F	○	○	角	—	—	○	—	—
G	—	—	角	—	—	—	—	○

(添付資料参照)

④ 発掘調査

発掘調査により、主に次のようなことが判明している。

- ・上段に焼失した礎石建物 1 棟を確認した。
- ・上段・中段の境界部分に堀跡を確認した。米、麦を主体とする炭化物層を検出し、小豆や大豆、蕎麦、胡桃等概ね 10 種類程度の炭化種子を採取した。炭化物層は焼土塊や木炭が混入し、堆積状況から判断するかぎり、倉庫のような貯蔵施設が焼失したことによる火事場処理の一括廃棄層と考えられる。
- ・中段・下段の境界部分に土塁の痕跡を確認し、西端で門跡・階段を確認し、東端では階段跡・水路・堀跡を確認した。
- ・下段では多数の柱穴を確認するとともに庭園の可能性のある立石を確認した。
- ・井戸跡周辺では石敷きや縁石、土器廃棄遺構等を確認した。
- ・検出遺構は重複して確認され、数期の変遷が推定できる。加えて、下層からも遺構が検出しており、西曲輪造成以前の館の付属施設あるいは家臣屋敷として利用されていた状況も推定できる。

イ. 整備計画

① 上・中段

館空間を体感する場の創出を目指して、今後発掘調査範囲を拡大し、その成果に基づいて礎石建物跡・溝跡などの復元を検討する。

② 下段

武田神社により、史実に基づき階段・小土塁・井戸跡などの遺構を整備する。これらの整備に伴い、既存の石碑等は史跡外へ移設する。

ウ. 造成・排水計画

・造成

遺構保護として、整備地盤面は遺構検出面から 30 cm以上の保護層を確保する。造成等の工事に用いる建設機械は遺構に影響を与えない規模のものを選定することや、必要に応じて敷鉄板等の養生を行う。

・排水

令和元年 10 月の台風により主郭・西曲輪間の堀に雨水が溜まり土橋を越流した。越流の影響を受けた範囲は流失しない舗装に改修するなどの対策を行う。

エ. 園路計画

安全・快適に利用できることを前提に、史跡価値や特質を理解できる園路を整備する。

南枳形虎口は、整備した土質舗装が上記の台風災害によって土砂が流出したため、復旧が必要である。今後、整備に伴う仮設道路となることから、整備終了後に土系舗装を行う。

また、館防衛の要である堀と土塁のあり様を体感できる視点場として、堀底に降りる通路を設ける。この通路は、堀斜面を損傷しないよう簡便なものとする。堀底の視点場からは、主郭の土塁裾に巡らされた石積み等を見ることができる。

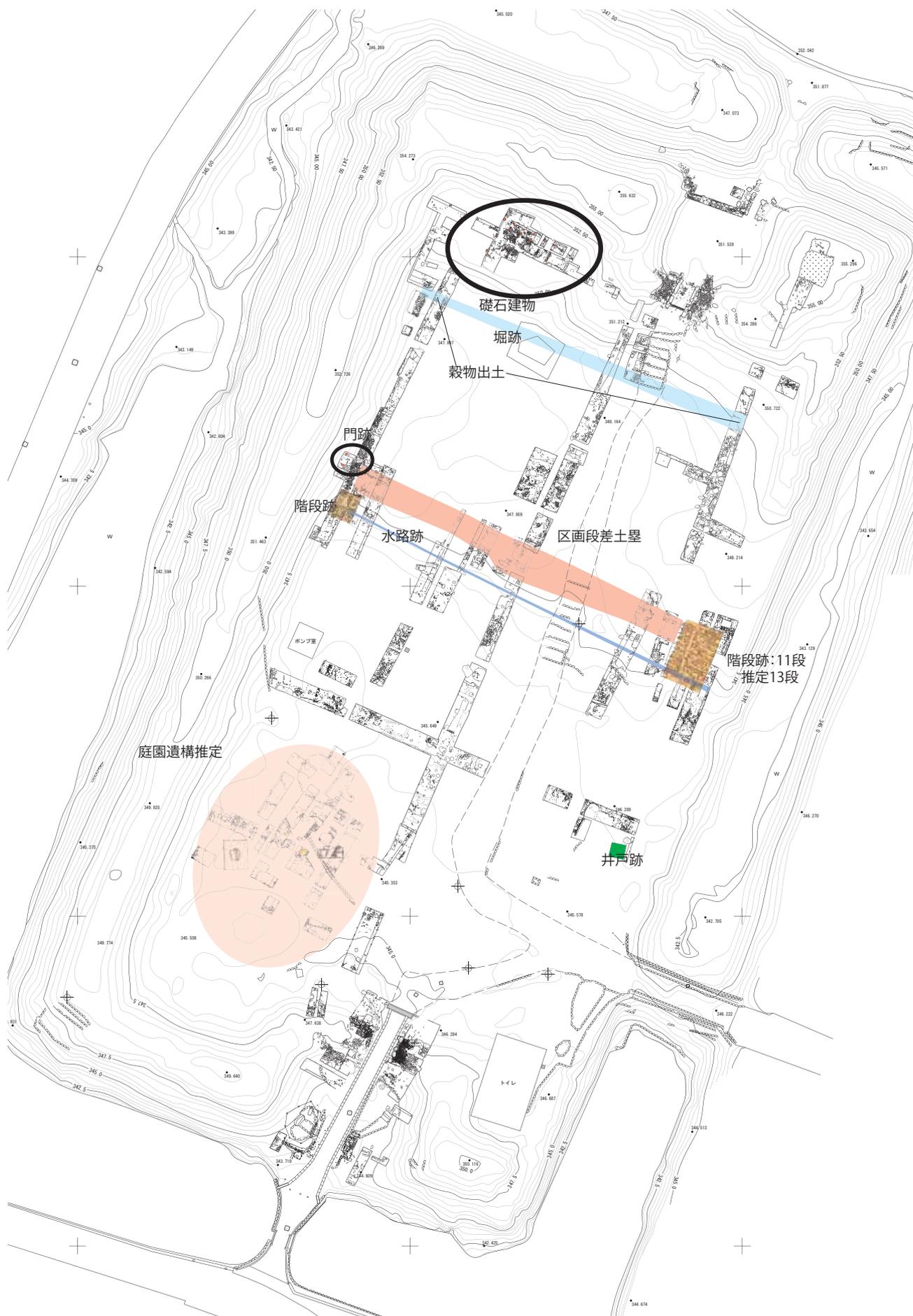
オ. 修景・植栽計画

曲輪全体を来訪者が認識できるような修景・植栽を行う。

- ・土塁等の遺構保存、視認性向上を図る上で阻害要因となっている樹木や石碑について、適切な措置を行う。
- ・発掘調査で庭園に関連する立石を確認しており、歴史的景観復元を目指し、文献等の資料調査を踏まえ、可能な範囲で修景する。

(当時の文献にみられる植物種の例)

マツ・ヤナギ・カツラ・ヒノキ・モミジ・カエデ・ウメ・キク・フジ・サクラ・タケ・サイカチ・カラタチ・エノキ・ムク・カキ



西曲輪遺構配置図 S=1:800